

特性・因子理論

～心理テストを用いたカウンセリングの基礎理論～

特性・因子理論とは言い換えれば、心理テストの理論である。「職業指導運動」、「精神衛生運動」と並び、「心理測定運動」はカウンセリングの源流の一つである。

特性・因子理論は進路指導を支える理論といわれる。キャリアや職業の選択は、自己理解、職業理解、合理的な推論によるマッチングによって行われる。人には個人差、職業には職業差があり、両者をうまくマッチングさせることが大切である、という考え方である。この考え方の元祖がParsonである。彼の職業指導理論(1909)は、心理測定で各個人の特性を明らかにし、職業分析で各職種が必要とする特性を明らかにし、そして各個人が自分の特性に適した職を選ぶという図式である。この考え方は、職業カウンセリングだけでなく、特性・因子理論に基づくカウンセリングの原型である。この原型に即してカウンセリングを進める人々をパーソニアンと呼ぶ。

・特性とは何か、因子とは何か

- ・特性～観察し、測定しうる反応のこと。
- ・因子～特性の背後にある抽象的なものこと。

(例) 幼児に、「先生のいった言葉のとおり真似をしてね」といい、幼児が言葉をそのとおりに繰り返したならば、幼児には記憶力があるとみなされる。また、幼児に、「馬はどんなものかな? 先生に教えて」といい、幼児が「競争する動物だよ」と答えたならば、幼児には概念化能力があるとみなされる。この場合、特性とは「記憶力、概念化能力」のことであり、その背景にある「ことばの能力」が因子にあたる。

<参考; 統計処理に因子分析という手法がある。これは、無数にある特性のうち、どれとどれがどの因子に起因する特性かを統計学的に推測する方法 >

・人間観・性格論・病理論

- ・「人間は特性と因子の束である。そして、その束は人様々である。特性の中にはいいものも悪いものもあるので、人間は本来善であるとも言い切れないし、悪であるとも言い切れない」
- ・テストの結果、数量的に性格を示すことはできるが弱い。
- ・「なぜ、人は問題を起こすのか?」という問いに対しては、「自分の特性・因子に合わない環境を選んだから」と考える。すなわち、マッチングの問題である。例えば、しゃべるのが不得意な人が、しゃべる世界に入ったから精神的なプレッシャーを強く受けるよう

になったと考える。治すには、心理テストを用い、組み合わせの違いに気づかせ、よりより情報を与えればよいと考える。

・心理テスト(検査)について

1.心理検査とは

被験者に対して一定の条件(実施方法)のもとで、ある刺激(問題や質問)を与え、それに対する反応(回答)をとおしてその反応の背景になっている心理的特性についての被験者の特徴を捉えようとする過程。測定しようとする人格の側面に応じて、知能・性格・興味など諸々の検査がある。(心理学小辞典より引用)

2.心理検査の効用

(1)客観的・科学的な診断ができる

・妥当性(あるテストが測定目的によく合致するものであるかどうか)、信頼性(他の検査者が同じような方法で検査しても同じように再現できるかどうか)が検討され、標準化されている。つまり、誰が、いつ実施しても、結果がほぼ一致するように作成されているために、客観的・科学的な診断ができる。

(2)短時間に多方面の診断ができる

(3)観察や面接でわからないことが診断できる

(4)深層心理が診断できる

・投影法では、無意識世界の深層心理が診断できる。

(5)検査するだけで治療・相談効果がある

・TAT(絵画統覚検査;Thematic Apperception Test)で、空想の物語を作成しているうちに、自己反省や自己洞察をし、自己解決に向かったり、カタルシス(浄化)が起こったりする場合がある。

(6)指導や相談の指針が得られる

3.心理検査の限界

(1)あくまでも補助的道具である

(2)テストによっては信頼性が乏しい

(3)投影法は査定が難しい

(4)被験者の気分に左右される

(5)年齢や能力によって実施できないものもある

4．心理検査の種類と主な内容

(1)乳幼児発達検査

遠城寺式乳幼児分析的発達検査法(1977)

・0～4歳8ヶ月。15分。乳幼児の発達を運動，社会性，言語の各分野ごとに評価する。

津守式乳幼児精神発達診断法(1961，1965)

・0～3歳，3～7歳。20分。子供の日常生活の行動を運動，探索・操作，社会，食事・生活習慣，言語の各領域から理解する。

新版K式発達検査(1983，Kyoto Scale of Psychological Development)

・0～13，4歳(増補版では，成人まで適用可)。30分。精神発達の様々な側面にわたって，全般的な進みや遅れ，バランスの崩れなどを調べる。

日本版デンバー式発達スクリーニング検査(1983)

・0～6歳。20分。外見上異常のないように見える者の中から，発達遅滞やゆがみのある可能性の高い者を見出す。

(2)個別式知能検査

全訂版田中ビネー知能検査(1947)

・2歳～成人。30～60分。知能水準や発達状態を明らかにする。

ウェクスラー式知能検査(1939)

・WPPSI(幼児用，3歳10ヶ月～7歳1ヶ月，45分)，WISC(児童生徒用，5歳～16歳11ヶ月，60分)，WAIS(成人用，16歳～74歳，60～90分)。知能を精密に診断し，知能構造を明らかにする。全体的知能水準に加え，言語性，動作性という個人内差で知能構造を明らかにする。WISCは現在，第3版まで改訂されている(WISC -)。

K - A B C 心理・教育アセスメントバッテリー(1993；Kaufman Assessment Battery for Children)

・2～12歳11ヶ月。15～60分。知能，習得度を継時処理，同時処理のモデルから明らかにする。子供の得意な認知処理スタイルを発見する。

I T P A 言語学習能力診断検査(1973；Illinois Test of Psycholinguistic Abilities)

・C A，M A が3～10歳。60分。情報処理に関する臨床モデルから知的能力を分析する。個人内差を明らかにできる。

C M M S コロンビア知的能力検査(1982；Columbia Mental Maturity Scale)

・3～9歳11ヶ月。15分。一般的推理能力を評価する。スクリーニングテストとして利用できる。回答は「はい - いいえ」で求めるため，手の機能や話し言葉に重い障害のある子供の知的能力を測定できる。

教研式ピクチュア・ブロック知能検査(1980)

・4～7歳11ヶ月(知的な遅れの考えられる児童は、4歳～11歳11ヶ月)。30～40分。動作性検査。障害のある子供に実施が容易。

グッドイナフ人物画知能検査(1944)

・MAが3～9歳。10分。人物画による動作性検査。

(3)集団式知能検査

田中A2式知能検査(1993)

・15～18歳。40分。言語的要素を多く含む。

新制田中B式知能検査(1949)

・8歳～成人。40分。絵画、図形、記号、数字などの非言語材料を使う。

京大NX知能検査(1955)

・5歳～成人。30～45分。全体的な知能水準を知ると共に、プロフィールによって、知能の内部構造を多面的に明らかにする。適用年齢に応じて、検査が用意されている。

(4)性格・人格検査

質問紙法

ミネソタ多面人格目録(日本版1993, , MMP I ; Minnesota Multiphasic Personality Inventory)

・15歳以上。45分～80分。ヒステリー、うつ、統合失調症等の傾向を測定する。550項目からなる。

矢田部・ギルフォード性格検査(1951)

・小学生～成人。30～40分。12の下位尺度ごとに10問計120問の質問から構成。全体的プロフィール傾向から、平均型、情緒不安積極型、安定消極型、安定積極型、情緒不安消極型の類型論的評価ができる。

投影法

ロールシャッハテスト(1921)

・5歳～成人。50分。当初はインクブロックテストと呼ばれた。左右対称のインクシミについての質疑から、性格、思考様式、感情状態、対人関係、自己認知といったパーソナリティ構造を捉えることができる。

主題統覚検査(1943, TAT ; Thematic Apperception Test)

・5,6歳～成人,老人。45分～1時間。人間的な営み、体験を示唆する絵を被験者に示し、その絵から、登場人物の欲求、将来を含めた物語を構成させ、被験者の欲求体系を明らかにする。児童版はCAT,成人版はSAT。

文章完成テスト (1960; S C T; Sentence completion test)

・ 8歳～成人。40～50分。「私は子どもの頃……」というような、未完成の文章の後半を連想して記入する。比較的浅い、「前意識」レベルを明らかにする。

ローゼンツァイク P F スタディ (1987; Picture-Frustration Study)

・ 4～20歳。15～20分。他人から害を被った場面、欲求不満が喚起される場面などがイラストで示され、被験者は空白の吹き出しが書かれている人物に同一視し、発言を記入する。被験者の比較的意識されやすい反応傾向を明らかにする。

バウムテスト (1970)

・ 3歳以上。3～20分。用紙に鉛筆で「実のなる木」を一本描かせ、その図を評定する。人格理解や精神発達、心理治療過程の理解に役立つ。

H T P テスト (1982; House-tree-person Test)

・ 幼児以上。被験者に家と木と人物を別々の紙に描かせ、その図を評定する。被験者の心的状態、知的水準を読みとることができる。

作業法

内田・クレペリン精神検査 (1937)

・ 中学生～成人。1時間。一列に並んだ数値を連続加算する作業を繰り返させ、それによって得られる作業曲線によって評定する。作業曲線に性格が反映すると捉える。

(5) 行動・社会性検査

S - M 社会生活能力検査 (1980)

・ 乳幼児～中学生。20分。社会生活に必要な基本的な生活能力の発達を明らかにする。6領域130項目からなる質問紙調査。

東大式エゴグラム第2版 (1993)

・ 15歳以上。10分。交流分析における各自我状態へのエネルギーの割り振りを視覚的につかみ、対人関係における在り方を明らかにする。質問総数は60問。

田中式ソシオメトリックテスト (1967)

・ 小学校1年～高校。10～20分。学級集団における仲間関係の構造を社会測定的に明らかにし、学級が個々の子どもたちの学習や人間関係形成にとって健全な場となっているかを診断する。現実の一定場面を基準にして質問紙形式で問う。

ゲス・フー・テスト (1961)

・ 小学校3年以上。45分。人物推定法。構成員相互の評価により診断する。各人に「集団の中で親切な人は誰ですか」等を質問用紙に記入させ、集計する。

(6)運動能検査

ムーブメント教育プログラムアセスメント (1985 ; M E P A ; Movement education program assessment

・ 0～72ヶ月。40分。ムーブメント教育を適切に進めるために子供の運動と心理的諸技能の実態を評価し、発達促進のための指導指針を得る。

< 参考 ; ムーブメント教育は、子供の身体的能力と運動とが、心理的能力 (コミュニケーション、認知能力、問題解決能力) や情緒と密接不可分な関係にあり、前者を促進させることにより、後者の発達を促すことができるという考えに立っている >

(7)知覚・感覚検査

フロスティック視知覚発達検査 (1977)

・ 4～7歳11ヶ月。30～40分。視知覚能力の発達が不十分なときに、学習障害や情緒障害を起こす子供が多いので、その治療教育に役立てる。

* テスト・バッテリーとは

一つの目的のために使用される一連のテストの組み合わせ。個々のテストはそれぞれに限定された測定目的をもち、単一のテストでは個人の特性の一面しかとらえられない。そこで、目的に応じて複数のテストを組み合わせ実施し、より広い角度から個人を理解しようとする。例えば、知能・学力・性格の各検査の組み合わせなど。(心理学小辞典より引用)

< 参考・引用文献 >

- ・ 心理テスト法入門, 松原達哉, 日本文化科学社, 1995
- ・ 心理学辞典, 中島義明他, 有斐閣, 1999
- ・ カウンセリングの理論, 國分康孝, 誠信書房, 1980

< メモ >